

海の生物と環境の保全

海

海

東京水産大学名誉教授
海中公園センター研究所長

宇田 道隆



夏は海辺で海水浴や釣、波乗り、ヨット、潜水などのレクリエーションも盛んだが、グラスボートや海中展望塔で見るサンゴ礁や色とりどりの小魚など見るのも楽しい。海中公園は、このような美しい海中の景観を多くの人々に見せるとともに環境を汚したり破壊したりしないように保全しようという目的で設立されたものである。陸上では国立公園があつて森林などの美観が保護され、観光に供されている。だが反面、産業経済の発展につれて全国的に急速な環境の荒廃変化が進んで来た。それが最近三十年ぐらいの間に急激に進んで来た。陸上でも甚しい変り方だが、河川や湖水、海岸ではことにひどいありさまで、少年のときの遊び場は次々に失われていった。魚も貝も藻もエビ、カニも見えなくなり、汚れた次第に汚れたままになった。GNPの増大で人々は豊かになり、遊楽交通の便も開け、せい沢にもなったが、精神的の荒廃はあきれるほどで、青少年にとりわけはつきりそれが目立って来た。経済要求が昂じて一切が金に換算して見られる風潮となり、金銭欲にからんだ争いや犯罪が激増した。開発の名の下で、老樹も片っぱしから切り倒されて陸の緑を失っていったが、沿海も油や汚水、農業、洗剤などの流入による赤潮、ビニール、プラスチック、空缶などで無残に汚濁し、ドブ川のようになって来た。そして、白砂青松の海水浴場はいつの間にか消失した。それで十年ぐらい前から環境問題の騒動が方々で始まり、世界的な問題とされて環境宣言や決議をして環境を守ろうとする大衆運動が起つて来た。

日本、ソ連など漁船の活動は世界海洋にひろがったが、後進各国を刺激し、一方では大陸棚の鉱物資源(石油など)の開発から米国の大陸棚宣言が口火となり、ラテンアメリカなど二百涇沿海確保の先鞭をつけた。一九五五年ジュネーブ国際海洋法会議が

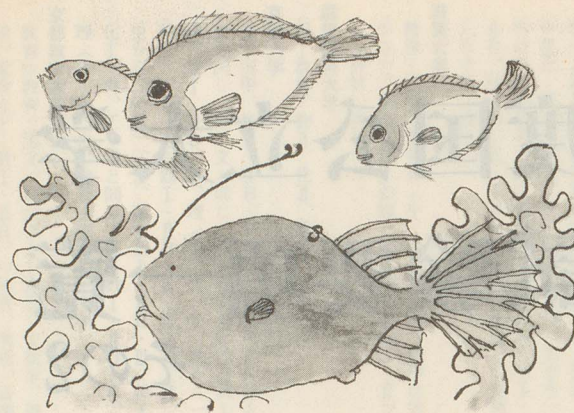
一九六〇年、一九七三―七五年と紛糾を重ねる中に十二涇領海、二百涇専管水域が世界の犬勢となった。日本の漁業者はそれでもまだ希望をつないでいたが、米、加の宣言に続くソ連の宣言が一九七六年にあ

共に、沿岸漁業の過密乱獲防止が憂慮されている。事は国民の生存の基本となる蛋白食糧の確保の問題である。南極洋、北洋の捕鯨もクジラ愛護の立場から十年禁漁を欧米などから迫られている。牛豚馬鶏

ンジンはみな水素にして無公害で地球が続く限り枯渴しないエネルギーに頼り安定した生活にきりかえの時代に移らねばならない。

主食の米麦、豆など自給率を今の四〇%から八〇

一九六〇年、一九七三―七五年と紛糾を重ねる中に十二哩領海、二百哩専管水域が世界の大勢となった。日本の漁業者はそれでもまだ希望をつないでいたが、米、加の宣言に続いてソ連の宣言が一九七六年にあつて決定的打撃が下された。北洋の漁獲（スケトウダラ、サケマス、カレイ、ヒラメ、メヌケ、タラ、ギンダラ、カニ、ニシン、ツブガイ、クジラなど）四百余万トンが一挙に奪い去られ、北方領土や日本の領海権まで危くされようとする大変な形勢に急転直下し、既往長年の開拓の実績も無視され、憤激と



共に、沿岸漁業の過密乱獲防止が憂慮されている。事は国民の生存の基本となる蛋白食糧の確保の問題である。南極洋、北洋の捕鯨もクジラ愛護の立場から十年禁漁を欧米などから迫られている。牛豚馬鶏など飼育動物とちがう野生動物で、従来の資源保護の不徹底から絶滅に瀕しているからというのである。日本は数十万トンの蛋白食肉源の鯨肉は肉吉、ハンバーグ等色々混入利用しているから困ると言い聞かされている。オキアミはヒゲ鯨の餌だが、これが人間のエサに変わりつつあり、今年は一萬二千トンも南極洋から獲って来た。小エビ代りに盛んに用いられている。イワシ、サバは日本沿海豊漁で三百万トンほど揚がっていて、黒いが味のよい栄養満点のスリミでカマボコ、ハンペン等々、スケトウダラなどの白味のそれらと交代しつつある。漁業外交は先見の無さで後手に後手を重ねて来たが何とか力を合せて今から窮境を脱出しようと努力ははじめている。外国と合弁方式その他共栄で行くが、魚価は高くなる。今後はどうしても沿岸漁業に力を入れ、資源を培養、愛護しなければならぬ。栽培漁業も高価なハマチを作るのに十倍もイワシ、アジ、サバを投餌するのには疑問がある。だが、最大の解決すべき問題は沿岸環境の産業、都市廃水による汚染であり、食品を毒化さす質的被害だけでなく、量的にも数百万トンの水産蛋白食糧供給の途を閉ざすことになる。人工漁礁を二千数百億円投じて七ヶ年間に日本沿海に布設するといつても、水質、海底を汚染させたら藻場も失せ、魚の仔も育たないのでムダ骨に終る。

今後の戦争は環境汚染との闘いである。原発は放射能汚染と温排水の始末ができぬ以上ダメである。早く太陽、海洋、風力、地熱からの自然エネルギーを使って、水（周りの海の水）から水素エネルギーに転換、輸送、貯蔵、配給し、自動車、航空機のエ



たが、後進各国を刺激し、一方では大陸棚の鉱物資源（石油など）の開発から米国の大陸棚宣言が口火となり、ラテンアメリカなど二百哩沿海確保の先鞭をつけた。一九五五年ジュネーブ国際海洋法会議が

ンジンはみな水素にして無公害で地球が持続限り枯渇しないエネルギーに頼り安定した生活にきりかえる時代に移らねばならない。

主食の米麦、豆など自給率を今の四〇%から八〇%位にすべく、輸入に依存すると西紀二千年までの寒候冷害で杜絶して泣かねばならぬ。深海のマンガンの鉱物資源の開発も大いにやるべきである。銅、ニッケル、コバルトなど莫大な資源が得られる。海へ廃水を出す前に有用ナリウムや重金屬など抽出し再生循環利用すべきである。鯨や魚貝は今よりふやすうにすれば、よそから文句は出ない。要是科学技術を人間をいためつける道具（核兵器のようなもの）に使わないで、人間の真の幸福のために活用することで、海と生物に愛情をこめた開発利用でなければならぬ。日本のGNPは世界でも驚くほどだが、その反面下水普及率が二二%とかで、諸先進国の九〇%以上と大差があり過ぎ、汚水の始末もしないで「金もうけのアニマル」だなどと悪口をいわれている。

第一、代議士選挙から、総裁（首相）選挙、入学から何もかもカネカネで動いていて、組合もカネ目当てる闘争で物価釣り上げを結果しているのだから、一べん皆で子孫の幸福のために教育の原点から考え直さねば、何のために金もうけしているかわからぬことになる。

太陽、清浄な空気（酸素は緑の植物の光合成による）、水、魚貝藻、鉱物、エネルギーを供給して人間を永續させてくれる永遠の母なる海に感謝し、その豊かな恵みを受け、海を楽しむようにしなければならぬ。放射性廃棄物や、重金屬、温排水、農薬、洗剤、PCB、ビニールなどのゴミを投棄しないで、再生有用化する新産業時代、水素エネルギー時代に転換すべきである。